



TITLE:

<批評・紹介>古閩地に関する研究三種

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. <批評・紹介>古閩地に関する研究三種. 東洋史研究 1936, 2(2): 159-163

ISSUE DATE:

1936-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145580>

RIGHT:

て錯雜した社會史經濟史の全體を一個の法則的見解によつて律し去らうとする立場は餘りに自然科學的である。歴史を支配する偶然性の問題はもつと大きく考へらる可きものであり、又歴史が事實として我々に示してゐるものは常に自然的なるもの、社會的經濟的なるもの或は個性的精神的なるもの等の雜多に相關せる複雑なる様相である。それは常に定則的よりも寧ろ多分に偶然的であり、絶對的なるものゝ表現であるより寧ろ常に相對的なるものゝ表現である。それ故に歴史は形式的論理によつて把握せられるものではなくして直觀によつて把握せられ歴史の論理によつて理解さる可きものである。かゝる見方からすれば、陳氏の立てた個體社會なる概念も亦充分批判檢討の對象とならねばならぬであらう。而し要するに本書の持つ意味はそれか如何なる缺點があり、又如何なる立場にあるにしろ、從來の支那の社會史家經濟史家が陷つてゐた無反省な西歐的理論追隨の盲動の見解から脱して、全く一個の支那独自の社會形態を認識せんとした所であり、その努力の跡は充分認めらるのである。即ち本書は此の意味で支那に於ける社會經濟史研究史上に於ける一個の清算書であり、又將來に對する問題を展

開した所のものであると言ふことが出來やう。それ故に私は本書は將來の學者が支那の社會史經濟史の研究に當つては必ず一度は顧みて批判の對象としなければならぬもので十把一束して書庫の塵に埋らせて置くのには惜しい本であると思ふ。
(宇都宮清吉)

古閩地に關する研究三種

本年九月の禹貢半月刊(六卷三期)に葉國慶氏の「冶不
在今福州辨」と言ふ小論文が出てゐる。これは昨年十月
勞幹氏が國立中央研究院歷史語言研究所集刊(第五本第一
分)に「漢晉閩中建置考」を著はして、葉氏が嘗て燕京
學報(第五期)に發表した「古閩地考」に反對したのに對
する辯駁なのである。我が國では和田教授が本年六月の
本誌(第一卷第五號)上に於いて、市村博士の説を援用
し、「秦の閩中郡に就いて」なる論文を公にして葉氏の説
を非難されてゐる。これは勞氏とは獨立に發表されたも
のであるが、偶然にも葉、勞二氏の説を調停したかの様
にも見られるのである。

此處に問題となる治縣は別として、福建に明らかに郡
縣が置かれたのは後漢末からの事であるが、開發が非常

に後れた爲、此の地方の状態は長く暗黒の中に閉されてゐた。後世閩と言へば今の福建を指す名稱である事は言ふ迄もないが、秦の閩中郡や漢代の閩越が現在の何處に當るかと言ふと未だ明らかでなく古來異論が多い。漢初の閩越の都は史記東越傳に依れば東冶であるが、漢書閩越傳では冶となつてゐる。此の冶は漢書地理志會稽郡二十六縣中に數へられて居り、又同書嚴助傳にも「閩王以八月舉兵於冶南。」とあり、其の注には蘇林を引いて「山名也。今名東冶。」とある。續漢書郡國志會稽郡の條に東部侯國と言ふ者があるが、國は官の誤であつて、後漢書鄭弘傳注所引太康地記に「漢武名東冶。後改爲東侯官。」とあるのに依つて明らかな如く、冶と東冶即ち侯官とは同所であつて今日の福州に當ると考へるのは從來の通説である。錢大昕（二十二史攷異）や沈欽韓（後漢書疏證）等の唱へる所であり、王國維は巧みな考證に依つて之を強調した。（觀堂集林卷十二 漢會稽東部都尉治所考 後漢會稽東部侯官考）

然るに此處に問題となるのは、續漢書郡國志會稽郡に「章安故冶。閩越地。光武更名。」とある一條である。後漢の章安は今の台州に當るから、之を誤として斥ける

か、之に依つて閩越の都を浙南にありとするか否かの疑義を生ずるわけである。葉國慶氏の研究は此の條を全く無視した王國維の説に對してなされたものである。閩越の都を東冶とする史記を誤とし、漢書に冶とあるを正しいとす。三國吳志虞翻傳注所引會稽典錄に、「元鼎五年除東越。以其地爲冶。并屬會稽。而立東部都尉。」とある様に、冶に都尉を置いた記事はあり、又東冶と侯官とを互稱する例はあるが、冶に侯官を置いたと言ふ事はない。蓋し冶と東冶とは別地であつて、前漢の冶が後漢で章安となり、東冶が東侯官となつたのである。兩地共に浙南にあり、冶は台州、東冶は温州附近にあつたらしい。三國になつて福建に郡縣が置かれた有様から言つても中央勢力の南進と共に此の地方も次第に開拓されて行つたのであつて、已に前漢時代から遙か中間空地を隔てた福州の附近に縣が置かれた筈がない。又邊境の要地に設けられ蕃夷の綏撫に従事する職であつた侯官の治所も、やはり之と共に南遷して終に福州に其の名を止めた者であらう。要するに漢初に於ける閩越の本據は浙南にあつたと言ふのがその結論である。

次に勞幹氏の説を述べると、續漢志に「章安故冶云々」

とあるのは、其の條の注に引いた「本鄞縣南之廻浦鄉。

章帝章和元年立。」と言ふ太康地記とも矛盾があり、宋書州郡志以下歷代地志の疑を挾んでゐる所である。從て古來續志を以て誤とする者が多い。治と東冶は蘇林の言ふ如く同地を指すものでなければならぬ。前漢の廻浦縣が後漢の章安・永寧の二縣となつたのであり、前の治縣は後の東部侯官、後漢末の建安・漢興・南平・侯官四縣の地に當る。而して治即ち東冶が海口であつた事は明らかであるから、福建地方發達の大勢から考へて、今日の福州附近とするのは當然である。吳志孫皓傳に建安海道とあるのは東冶より南海に赴く道を指した者に相違なく、吳がその地に典船校尉を置いた理由もわかる。然し乍ら治縣(即ち東冶の治所)と侯官とは別地であつて、後漢が治縣を廢してから、その地は侯官の所屬となり、侯官は後漢末に縣を置かれて今日に及んだ。東冶は晉代になつて晉安郡となつたもので、今日の閩縣に當る。要するに古代の閩越漢の治縣の地の大部分は現在の福建地方であるとする説である。

之に對する葉氏の反駁は大體に於いて前説を反復するのみで何等新味がない。唯漢書嚴助傳に見える越王が南

して保つたと言ふ泉山は今の福建北部の浦城縣にあると言ふ事を主張して、閩越の本據が浙南にあつたとしてゐるのである。後漢書の三國志に見える東冶は東南海上交通の要地として相當に榮えた所であり、後漢書方術傳の徐登の如きは此の地の人として知られてゐる。勞氏が前漢時代から縣が置かれた理由を説明するのもかゝる點に基くのであるが、後の福建開發の狀態から考へて疑を挾む餘地がないでもない。葉氏が治は福建にあつた筈はないと主張する理由も成立つのである。然し侯官縣は明らかに晉代から福建にあつた事實からみると、葉氏の言ふ様に後漢・三國・晉と代を経るに従つて侯官の治所も會稽より建安・晉安へと南遷して行つたと考へる事は餘り附會に過ぎる様である。

次に和田教授の説を述べる前に市村博士の治と東冶とに關する解釋(東洋學報第八卷第一號 唐以前の福建及び臺灣に就いて)を見るに、漢書が閩越の都を治と改めたのは誤で史記に従つて治とするのが正しく、治縣とは續漢志に見える様に今日の台州附近である。閩越の北にあつた東甌が温州の附近であつた事は誤がないから、閩越は福建に當り、その都東冶は三國吳志賀齊傳に「王朗奔東冶。

侯官長商升爲朗起兵。」とある侯官即ち今日の福州侯官縣であると考へられる。和田教授に依れば、若し閩越が今の浙南であるとすれば、その地は明らかに漢の領域に屬するから、武帝が秦の始皇を襲つて閩中郡の故稱を回復しなかつた筈がない。又閩越は廣東地方に據つてゐた南越と境を接してゐた事は疑なく、秦代に於ける東甌・閩越・南越と言ふ民族分布の状態から考へて、東甌が浙南に居つた事は疑がないから、閩越はその南即ち今日の福建にゐた者と見なければならぬ。而して秦が當時かゝる邊鄙の地に郡を置いた理由は始皇三十三年南越を討平した威に懼れて閩越が秦に降つた結果である。従つてその地に郡は置いたが、名義上の者で何等特別の施設をする事もなく漢代に到つたのであらう。

以上は和田教授の説の概要であつて、閩越の位置を當時の大勢から見て今日の福建に當る事を明快に論ぜられた者である。然し乍ら治と東冶との關係に就いては全く市村博士に従はれてゐるのは物足らなく感ぜられる。一體市村博士が閩越の都たる東冶と、漢書地理志の冶縣とが同一でないと論ぜられる根據は續漢志の「章安故治。閩越地光武更名。」と言ふ一條であるが、之には明らかに

閩越地とある。尙東甌の位置を温州と斷定せられた第一の理由は同じく續漢志に「永寧。永和三年以章安縣東甌鄉爲縣。」とある記事である。さうして冶縣は今日の台州にあるとせられるのであるから、東甌が閩越の南に來ると言ふ不合理を生ずる。思ふに續漢志には誤りがあつて、後漢の章安縣の附近、略々前漢の廻浦縣に當る處こそ東甌の故地であつたのではないだらうか。漢書地理志を見ると會稽郡の最南の縣は廻浦と治である。此の二縣は、武帝の閩越征伐の後置かれたもので、廻浦が東甌の地であるとすれば、冶縣も恐らく殆んど時を同じくして閩越の地に置かれたのではないかと考へられる。次に注意すべき事は史記及び後漢書、三國志吳志將欽傳を除くには東冶とのみあつて、冶が殆んど見當らぬ事である。然るに漢書では地理志を始め三箇所ではあるが悉く冶となつてゐるのは、地理志に基いて漢書の著者が史記の文字までも改め統一したのであらう。武帝が冶縣を置いたのは邊境開拓を目的としたのであつて、其の治所は恐らく當時の閩越の都たる東冶に置かれたと思はれる。然し寧ろ名義的な者であつて、疆域の如きも明らかでなく、普通には東冶と呼ばれてゐたのであらう。やがて冶縣は

廢されたが東冶は海上交通の要地であつた爲に侯官が置かれ後漢末に及んだものと見える。此の地方の地理沿革が不明瞭になり區々の説が行はれるに至つたのは、かゝる治縣の曖昧な存在に基くのであると思ふ。かくて私は略々從來の説を信じ乍ら、冶と東冶との關係に就いては右の如く考へたい。聊か卑見を述べて批評に代へる次第である。

(日比野丈夫)

滿和滿洲實錄 東洋史研究會叢刊第一

今西春秋譯稿

東洋史研究會は隔月に「東洋史研究」を世に問ふのほか、學術資料の刊行を計畫し、その叢書を「東洋史研究會叢刊」と名づけた。今度その第一冊として同人今西春秋學士の譯にかゝる滿和對譯滿洲實錄を推した。

同書は舊奉天崇謨閣所藏の滿洲實錄をテキストに用ひその滿文の箇所を翻譯したものである。滿文はメレンドルフの式によつてローマナイズし、之に譯文を附した美濃版洋紙で凡そ四百頁の大冊であり、解説並に人名地名索引を附した良心的な書である。今日滿洲文を解讀する事に於いてすら可成りの苦勞を要する時、譯者は難解な

る實錄を全譯し、且之が謄寫に従事する事一年餘、文字通り獨力にて成つた書である。吾々は此の書を手にして改めて譯者の刻苦精勵の程を思ひ、衷心からの敬意を捧げるに吝ではない。

譯者は「滿洲實錄は稀覯の書であり、常人の披見の不可能なる事を思ひ、索引代りに此の書の譯刊を思ひたつた」と謙讓なる言葉を述べて居るが、實は譯者の目頃志す史料の嚴密なる批判から出發したその成果の實踐を見るべきであらう。

近時清太祖實錄に就いて見ても數種類の刊行を見た。滿洲實錄もその一であるが同書の特徴は滿漢蒙の三體で記された所謂繪入本である點に存する。

今西學士はその勞作「清三朝實錄の纂修」(史林十九卷三、四號)に於いて之等一聯の實錄を嚴密に批判系統づけて所謂滿洲實錄の滿文を以つて、尤も原初的な形式とした。そして「太祖實錄に依據せんとする時には先づ滿洲實錄に據りその他の漢文實錄、或は改修實錄の如きは之を一の解釋として參考すればよいと云ふ事になる」との結論を下した。我々はこの見解に従はなければならぬ。

更に滿文滿洲實錄の重要性は同學士の指摘の如く之を